

政・外交の枠組を変えることなしに遂行された。」(p. 122)バンコク時代と呼ばれるタイ国史上の新しい時代は、かくして、「明確な断絶ないしは変移の一线を画することなく」(loc. cit.) 開始されたのである。著者 Wenk は、I 世王の登位をもって、いわゆる “new Siam” が始まるとする通説をしりぞけ、“in a very hesitant way” という留保をつけつつも、モンクット王の治世をもって近代タイ国の開始の時期としている。

本書はその前半において国内諸制度の復興につきのべ、後半はもっぱら旧領土の回復戦役を含む対外関係の記述にあてられているが、史料の関係もあってか、力点は後者におかれているように思われる。前者のテーマについては、つとにターニ親王のモノグラフ “The reconstruction of Rama I of the Chakri Dynasty,” *JSS* XLIII: 1 (1955) が発表されているが、本書の記述は、「パタルン年代記」「ナコンシータマラート史料」などによる、地方行政組織の叙述があるほかは新味に乏しい。今後「三印法典」などの根本史料を利用しての、さらに精緻な研究の出現がまたれる。

対外関係は、本書の中心部分をなすもので、主としてタイ語およびラーオ語史料によって、ビルマ戦役とその終結、ラーオ諸国、マラヤ土侯国およびカンボジア征服の過程があとづけられている。安南および西欧諸国との交渉史は簡潔な記述にとどまる。

1957年に Walter Vella がタイ語文献を駆使してラーマ三世王時代史 *Siam under Rama III, 1824-1851*. (New York, 1957) を発表して以来、ラタナコーシン史に対する関心はとみに高まり、今日までに、IV 世王年代記の全訳 Chadin Flood (tr.) *The Dynastic Chronicles Bangkok Era, The Fourth Reign*. 4 vols. Tokyo, 1965-, V 世王にかんするタイ語文献を訳編した Prachoom Chomchai, *Chulalongkorn the Great*. Tokyo, 1965. など、タイ語史料による研究が次々と刊行された。今回 Wenk の労作が世に出たことによって、ラタナコーシン王朝の最初の5王の研究が、II 世王をのぞき、ことごとく英語で利用可能の状態となったことを喜ぶたい。

(石井米雄・東南ア研)

National Family Planning Board,
Malaysia. *Report on the West Malaysian Family Survey, 1966-1967*.
Kuala Lumpur, n.d. xlv+534 pp.

開発途上国の人口増加はきわめて著しく、それぞれ深刻な人口問題を生み出している。マレーシアも例外ではなく、約3%に及ぶ増加率が記録されている。このような事態を背景に、この国の主要部 West Malaysia (マレー半島部) における出生力の動向をさぐるために、West Malaysian Family Survey が行なわれた。この調査はマレーシアの National Family Planning Board とミシガン大学の Population Studies Center とが協力して、1966年末から1967年はじめにかけて実施した。

報告書は四つの章および Appendix からなる。第1章から第3章までは調査方法の解説および調査結果の要約にあてられ、第4章では345ページを費やしてぼう大な量の集計表が示されている。Appendix A には West Malaysia 全域を対象として、各質問に対する解答の実数が示され、Appendix B には調査に用いられた質問票が、Appendix C には調査員に対するインストラクション、Appendix D にはコーディングに関する説明がおさめられている。

この調査の対象は15~45才の既婚女性で、サンプル数は5,457である。サンプリングおよび集計の主な関心は、大都市、町、村落という三つのグループにおける差異にむけられている。この国における生活状態を規定しているもう一つの重要な要素である民族による差異が、政治的な理由からか、あるいは調査企画者の不注意からか、十分に扱われていないことは、調査の価値をやや低めているといわざるを得ない。質問票は300以上の質問項目を含み、非常に意欲的なものであるが、この種の調査としてはやや欲張りすぎたきらいがないでもない。とはいえ、この報告書は、この種のデータに乏しい開発途上国の出生に関する現状および態度を知るためきわめて重要な資料といえよう。

(坪内良博・東南ア研)